

25. 悪性腫瘍の経過観察における肝スキャンと CEA の利用

○多田 明 油野 民雄
利波 紀久 久田 欣一
(金大・核)

われわれは、ロッシュ社製 CEA キットを用いて、すでに 1200 検体について測定を行なった。

CEA 測定の意味が“癌の診断”から経過観察の指標に変わってきたが、今回は、肝転移の有無と、肝内欠損の経過観察の目的で 2 回以上 CEA 測定と肝スキャンを行なった 32 例について報告する。

核医学外来での初診時の肝スキャンと、CEA 値をくらべてみると、CEA 値が 20 ng/ml 以上を示し、肝スキャン正常と判定されたものが 4 例あった。内 3 例については、手術所見にて肝転移陰性であった。しかし 4 例全例が 1 カ月から 1 年後には肝転移を来し、肝スキャンにて欠損を認めた。

CEA 値の変化と肝スキャンの変化の組み合わせで 9 つの subgroup を作った。32 例中 22 例で、CEA と肝スキャンの変化が一致した。CEA が上昇したが、肝スキャンにて欠損の縮小を認めた胃癌の 1 例と、CEA 値が低下したとのに、肝スキャンでは multiple defect を呈した胃癌の 1 例があった。

また、MMC 動注などによる治療に反応を示した転移性肝癌で、CEA 低下と肝スキャンでの改善を認めた例が 2 例あった。

手術前に CEA が高値を示す場合には、術中所見で肝転移陰性であっても将来、肝転移をおこす可能性が大きい。

CEA 値の変化は、治療効果とよく相関したが、原発性肝癌や一部転移性肝癌で解離所見を認めた。

26. 骨シンチ用製剤 MDP の使用経験

仙田 宏平 今枝 孟義
浅田 修市 加藤 敏光
土井 偉誉
(岐大・放)

^{99m}Tc -MDP (Methylene Diphosphonic Acid) を入手する機会を得たので、若干の基礎的ならびに臨床的検討を行い、その有用性を検討した。

^{99m}Tc -MDP は、科研より提供された調製用キットを用い、従来の ^{99m}Tc -リン酸化合物と同様に one step で調製し、その 10~20 mCi を小児 1 例を含む 14 例の患者に静注した。静注後 3 時間に、シンチカメラを用い全身骨格のシンチグラムを撮像した。これら患者の内 2 例については、比較的短時間で、 ^{99m}Tc -EHDP による骨シンチグラフィーを施行した。一方、 ^{99m}Tc -MDP を使用した 10 例と ^{99m}Tc -EHDP を使用した 5 例について、静注後 5 分、10 分および 3 時間の血中放射能濃度を測定した。また、 ^{99m}Tc -MDP の放射化学的純度および安定性を、85%メタノールを用いたペーパークロマトグラフィーによって調べた。

その結果、以下に述べるごと成績を得た。1. ^{99m}Tc -MDP の放射化学的純度および安定性は十分に満足できた。2. 本剤の血中クリアランスは、 ^{99m}Tc -EHDP のそれと比べ、速い結果を得た。3. 骨シンチグラム像は、本剤と ^{99m}Tc -EHDP との間で、明らかな優劣を認めなかった。4. しかし、本剤は、 ^{99m}Tc -EHDP と比べ、腎描画が淡い傾向を認めた。5. この傾向ならびに血中クリアランスの速さからみて、本剤は、 ^{99m}Tc -EHDP と比べ、静注後早期より骨シンチグラフィーが可能であると思われた。